

King Lear における “Kindness”

金 城 盛 紀

1

Lear. I lov'd her most, and thought to set my rest
On her kind nursery.¹

Lear. I have another daughter,
Who, I am sure, is kind and comfortable: (I. iv. 314-315)

Lear. I will forget my nature. So kind a father! (I. v. 33)

Kent. The Gods reward your kindness! (III. vi. 5)

Glou. O my follies! Then Edgar was abus'd.
Kind Gods, forgive me that, and prosper him! (III. vii. 90-91)

Kent. Kind and dear Princess! (IV. vii. 29)

上に引いたいくつかの “kind” “kindness” という語が、単に「親切(な)」
「思いやり(ある)」を意味する 現代英語のもつ以上の意味を含んでいることは
明らかである。Lear が娘たちに “kind” であることを期待するとき、
彼は年老いた父親ブリテン国王に対する、子として臣として家庭と国家の秩
序に従った人情の発露としての 孝と 忠誠をこそ欲している。Cornwall や娘
たちの厳命にもかかわらず (あるいは、それ故にというべきか)、嵐吹きすさ
ぶ荒野に老王を追ひ捜して救いの手を差し伸べようとする Gloucester の
“kindness” に対して Kent が感謝の意を表するとき、老臣の「親切」は、
日和見主義を捨て一命を賭して王に尽さんとする文字通りの滅私の行為を意味
する。その Gloucester が両眼をえぐり抜かれて初めて真相を知りえたとき、
不明の許しを乞い、謀られた Edgar の身に加護を祈る “Kind Gods” は慈愛
の神々である。キリストになぞらえられ、愛のアレゴリーと解釈され、神秘的

救済原理とも目される Cordelia² が “kind” と呼ばれるとき、この日常的素朴な語は「親切」や「やさしさ」を意味しながらも更に形而上学的な含蓄が附加されているように思われる。

King Lear におけるキー・ワードである “nature” や “bond”, また、これらの語の表す観念や「愛」「理性」などの主題については、いろいろの視点から数多くの立派な研究がなされ Shakespeare の「最も偉大な作品」の理解を助けてきた。³ “kind” という語はその派生語 “kindly” “kindness” “unkind” “unkindness” と共に *King Lear* におけるキー・ワードであり、その観念は「自然」「絆」「理性」そして特に「愛」の観念などと密接に関連して中心的主題を形成しているように思われる。しかしながら、批評家のこの語やその観念に対する関心は驚くほど低く、時おりにお目にかかる言及は鋭い洞察が光っていても incidental に触れたものに過ぎない。

2

The Tempest において、島に上陸したナポリ王一行の宮廷人たちが、魔術によって苦しめられ悲嘆にくれている状態を報告した Ariel に対して, Prospero は次のように述べる。

Hast thou, which art but air, a touch, a feeling
Of their afflictions, and shall not myself,
One of their *kind*, that relish all as sharply
Passion as they, be *kindlier* mov'd than thou art?

(underlines added)⁴

怨敵ながらその狂乱のさまを知らされて Prospero はこころ動かされる。彼の「憐れみの情」は、kind に kindlier を合せたことば遊びを通して「同じ人間として、人間にふさわしく」という両義的な表現となる。この言語遊戯を真似て *King Lear* における kindness の主題を一文で述べるならば、To be human is to be kind ということになるろうか。人間が禽獣や深海の怪物と本質的に異った人間としてのアイデンティティーを維持するには、人間的であること、すなわち、人間として他者との共感を持ち、こころをくばること——kind でなければならない。*King Lear* は「人間とは何であるか」と人間の本質を問い追求

する認識論を中心課題とする作品でもある。“Who is it that can tell me who I am?” (I. iv. 238); “Is man no more than this?” (III. iv. 103). 悪の力、人生の無情悲慘を見きわめて、Shakespeare が与える解答は、人間は本来的に kind であり、人間として生存するには kind でなければならないということである。Human kind “depends on kindness” for its survival. とは G. K. Hunter の的確な評である。⁵ 家庭も国家も人類全体もその存在は kindness があって可能になる。“kind” なる語は、もともと「(秩序ある) 自然」を意味し「自然に備わった資質、特徴」を表わした。形容詞としても「親切な」「思いやりある」という意味が与えられる以前は「自然の」「本来的」「血のつながりある」ということを意味した。⁶ 近代的、科学的、懐疑的な考え方や認識が広まった時代において、Shakespeare は中世スコラ哲学的世界観を「認識の第一基本原理」とし、⁷ kindness の観念をいささかの齟齬もなく彼の自然観、人間観の一部にしていたように思われる。

3

Lear 王は、娘たちと国家について根本的に誤った愚かな行為を行う。これを契機に忘恩と裏切りによって凄絶をきわめた苦しみを受ける。暗黒の嵐の中で白髪をかきむしって、人間の残忍非道を呪い大自然の破壊を叫び生命の根源を打ち碎けと咆哮する。

.... And thou, all-shaking thunder,
Strike flat the thick rotundity o'th'world!
Crack Nature's moulds, all germens spill at once
That makes ingrateful man! (III. ii. 6-9)

「罪を犯す以上に犯された人間」(III. ii. 59) の人間に対する全面的否定の絶叫である。このような絶対的否定はその結果として自己の否定すなわち死か精神の錯乱をもたらす。Lear は狂気の兆を感ずる。“My wits begin to turn” (III. ii. 67). しかし、この全面的否定、錯乱は悲劇的浄化を Lear にもたらす。徹底的な人間呪詛をさせた苦しみが Lear を変革する。

Come on, my boy. How dost, my boy? Art cold?

I am cold myself. There is this straw, my fellow?

The art of our necessities is strange.

And can make vile things precious. Come, your hovel.

Poor Fool and knave, I have one part in my heart.

That's sorry yet for thee.

(III. ii. 68-73)

国王として絶対的権力を掌中にして傲慢不遜であった Lear が初めて他人に対して kindness を示す。しかもその対象が王にとっては慰み楽しみの提供者でしかない存在であり、Cordelia を勘当した後はその愚かさを指摘して苦しめた道化であることも意味深い。「必要は不思議な力を持ち、卑しいものを高貴なものに変える」のである。嵐の中で、わら床が貴いものになるように、苦難という “vile” なものが必要という不思議な力によって “precious” なものに変えられ、卑しい道化をも Lear に自分と同じ一個の人間として見る眼を開かせるのである。

心中に吹きすさぶ嵐に打ちのめされ、混沌として荒れ狂う雷鳴風雨にさらされて立つ Lear は、変装の Kent に対して小屋に入って難を避けよとすすめ、道化にも先に入るようにと言う。

Prithee, go in thyself; seek thine own ease:

....

[To the Fool.] In, boy; go first....

(III. iv. 23-26)

A. C. Bradley は、いみじくも “the blessed spirit of kindness” が春風のごとく Lear に訪れたと評するが、⁸ 身近かでふるえる二人の従者に対して示される kindness に続くのが、同じく Bradley をして「Shakespeare を拝みたくするようにする文章のひとつ」⁹と絶讃せしめた貧者を思う祈りのことばである。

.... You houseless poverty,—

....

Poor naked wretches, whereso'er you are,

That bide the pelting of this pitiless storm,

How shall your houseless heads and unfed sides,

Your loop'd and window'd raggedness, defend you

From seasons such as these? O! I have ta'en

Too little care of this. Take physic, Pomp;
Expose thyself to feel what wretches feel,
That thou mayst shake the superflux to them,
And show the Heavens more just.

(III. iv. 26-36)

この祈りが、煉獄の苦しみを体験し狂気に近い状態で到達した Lear の覚醒を表すことは殆んど批評家が異口同音に述べる通りである。¹⁰ Lear の他者に対する拡大された意識、新しい憐みの情は漠然とした抽象的センチメンタルなものではない。これまで忘れていた住むに家なき、喰うに食なき貧しい者たちに思いをはせるとき、彼の面前には、風雨に打ちのめされて立ちすくむ Kent と道化が居る。いや、Lear 自身が「身をさらして惨めな者が味わう苦痛を味っている」のである。身近にあって共に苦しむ者に対するいたわりの念が想像の眼でしか見ることでできない国民に対する思いやりの情として拡大され、一般化されるのである。王の手に口付けをと乞う Gloucester に、“Let me wipe it first; it smells of mortality” (IV. vi. 135) と答える Lear は自分が万人と同じ人間であり mortal であるという認識を示している。

先に触れた Lear の人間呪咀も Goneril 個人に対する呪いから発している。“Hear, Nature, hear! dear Goddess, hear! / Suspend thy purpose, if thou didst intend / To make this creature fruitful! / Into her womb convey sterility!” (I. iv. 284-287) Goneril に対する呪いが個人を越えて人間全体へと一般化され人類絶滅の呪いへと発展する。この人間否定が肯定・受容へと転換するときも個々の人間から出発して人間一般へと拡大される。パターンは同じである。愛情、あるいは憐愍仁慈の情という普遍的な徳目が空疎な抽象観念としてもあそばれ、まさしく姉娘たちや Edmund がやって見せるごとく、我執の餌食にされるのも珍しいことではない。Shakespeare は Lear の再生にあたって血肉をもった個々の人間に対する具体的な kind の行為から出発させている。

Lear の祈りに見られる底辺の人びとに対する共感 は kindness の感情としてよいであろう。絶大無比の権力を掌握して国民に君臨する王が、身を低く

して惨めな人びととのつながりを自覚し思いやる。同じ人間という (kind, mankind) 感覚が、他者に対する人間的情愛の念 (kindness) となる。この情愛の念は人間としてまことに自然 (kind, natural) であり、*King Lear* のみならず、Shakespeare の精神的基盤となったルネサンス・ヒューマニズムの秩序、理性の観念に通ずる。¹¹ それは Shakespeare の世界観・人間観の根底となるものである。政治的にはきわめて保守的な国王中心の絶対主義的秩序を正義とする倫理がここに見られる。

King Lear における構造と主題の重層性についてはよく知られている。¹² 主筋のテーマを脇筋においても繰り返すことによって強調する技法は、苦しみを体験して精神的覚醒に到達する主題においても見られる。投身すべく Dover の絶壁への道案内を頼む盲目の Gloucester はわが子と知るよしもなく Edgar に財布を与えた上、慰めのことばをかける。

Here, take this purse, thou whom the heav'ns' plagues
Have humbled to all strokes: that I am wretched
Makes thee happier: Heavens, deal so still!

(IV.i. 64-66)

眼前の “poor mad Tom” を憐んで次の「一般論」がなされる。

Let the superfluous and lust-dieted man,
That slaves your ordinance, that will not see
Because he does not feel, feel your power quickly;
So distribution should undo excess,
And each man have enough.

(67-71)

暖衣飽食して自分を感じないが故に他人の不幸に目をつむることを天意は許さない。Gloucester はこのような天の力を身をもって感じたのである。天意を悟りその力を肌身で感じたこの老伯爵の意識にあるのは貧民弱者への思いである。Lear が苦しみを通して弱者を見る新しい想像の眼を開いたように、Gloucester もみずから苦痛を味わうことによって苦しむ人びとへの共感を体得するのである。この繰り返しが Lear における意識変革を強調するものであることは Kenneth Muir も指摘した通りである。¹³ それぞれの運命の車がどん底に廻り

来たときに、Lear と Gloucester 二人に共通してさずけられるのが底辺の人の
とに対する共感であり、憐みの情である。Enid Welford や Harry Levin
が “fellow-feeling” と呼び、Maynard Mach が “compassion” と呼ぶ他
者との一体感は kindness の感情にはかならない。¹⁴ 他者なканずく弱者を己
が fellow と感じ、その苦しみを共有する *com-pati* (suffer with) するこ
ろである。

Lear の場合と同様に、Gloucester の kindness の情もまず身近に居る者
に対する行為として示される。個々の人間の身を思い行為に表わして初めて一般
化された哀憐の情がことばとなるのである。

Edgar をして “My father, poorly led? World, world, O world! / But
that thy strange mutations make us hate thee, / Life would not
yield to age.” (IV.i.10-12) と思わず叫ばず陰惨な姿で登場する Gloucester
であるが、彼は80年余も仕えてきたという老人の身を案ずる。“Away, get
thee away; good friend, be gone: / Thy comforts can do me no good
at all; / Thee they may hurt” (15-17). 更に, “Above the rest, be
gone” (48)。

King Lear に登場する多様な人物はそれぞれ kindness の有無によって大
別できる。Bradley が指摘したように、この作品においては、個々の人間の葛
藤よりも、善と悪の力の普遍的な葛藤を見、善と愛、悪と憎しみを関連づけて
考えることも可能である。愛し献身する者は徹底的に愛し身を捧げ、他を憎し
み己の欲望を追求する者は徹底的にそうする。¹⁵ 端役にいたるまで善人はすべ
て kind であり、悪人は unkind である。Lear や Gloucester は基本的には
善人であり、kind な人間へと成長する。Albany も同じである。

善人たちは、残忍な行為に対して反発し、苦しむ者を憐み、王に対してはそ
の愚行をいさめ、あるいは粉骨の奉公を惜しまない。

Cornwall が Gloucester の眼をえぐり抜けば「子供の時から仕えてきた」
(III.vii.72) その従者が命を賭して主人に対決する。王国の半分を手にしたサ
ディスティックな男の非道を許さず、致命傷を負わず行動に駆り立てるのは

Glocester に対する従者の “fellow-feeling” であり kindness である。彼の人間の行為は残虐な人間の自滅性を示唆するともいえよう。

盲目となって城門から追放される Glocester に対して他の従者たちも義憤の声をあげ憐みの情を示す。

Third Serv. If she [Regan] live long,

And in the end meet the old course of death,

Women will all turn monsters.

Second Serv. Let's follow the old Earl, and get the Bedlam

To lead him where he would: his roguish madness

Allows itself to any thing.

Third Serv. Do thou; I'll fetch some flax and whites of eggs

To apply to his bleeding face. Now, heaven help him!

(III. vii. 99-106)

kindness が治癒のイメージで表現されているが、これは Lear と再会する Cordelia の姿につながり発展するものである。

King Lear における道化の役割はおどけて笑わすことではない。悲劇的緊張から解放し、そうすることにより緊張感を高めるコミック・レリーフとは異なる。直観的に真実を見抜くこの “bitter fool” (I. iv. 142) は辛辣きわまりない皮肉で王にその愚さを思い知らせる。

Thou wast a pretty fellow when thou hadst no need to care for
her frowning; now thou art an O without a figure. I am better
than thou art now; I am a Fool, thou art nothing.

(I. iv. 199-22)

しかし、王の生傷をえぐるような言辞を弄するこの道化は、繊細かつやさしき¹⁶ ところの持主なのである。道化において、ものごとを鋭敏に見抜く力が王に対する忠誠心 kindness と一体になっている。L. C. Knights の次のことばが思い出される。“Love is that without which life is a meaningless chaos¹⁷ of competing egotisms; it is the condition of intellectual clarity.”¹⁷ だからこそ「餓えた狼でさえその毛皮を濡らすまいとする」(III. i. 13-14) 嵐の中へ、道化は唯一人老王の供をしてついて行くのである。

That sir which serves and seeks for gain,
 And follows but for form,
 Will pack when it begins to rain,
 And leave thee in the storm.
 But I will tarry; the Fool will stay,
 And let the wise man fly:

(II. iv. 78-83)

自己に不利なときには逃げ出すのが世の賢者であることを承知の上で, Fool はその名の通り損な阿呆役をつとめる。Welford のことばを借りるならば, 道化を際立てるのは “the instinctive judgment of normal humanity raised to heroic stature”¹⁸ である。

王国を主題とする戯曲において, 徹頭徹尾主君に尽すことによって忠臣としての kindness の何たるかを示す人物——それが Kent である。この菌に衣を着せない短気剛直な武骨伯爵は, 「親切」でもなく「やさしい」人間にも見えない。しかし, 彼は王の愚行に対してあえて直諫し, その結果, 逆鱗に触れて追放されると変装して忠節を尽す。Kent は “service” (I. iv. 25) の権化である。文字通り滅私奉公する (“Follow’d his enemy king, and did him service / Improper for a slave.” (V. iii. 220-221)) 老伯の姿は, Cordelia が追放されて舞台から遠のいている間観客にたえずこの孝女を思い出させる。¹⁹ Kent はみずからも言うように “more man than wit” (II. iv. 42) の人間である。彼の言動は王に対する kindness の一変奉曲と解することができよう。

Lear が体得する人間愛と Kent の忠誠心を共にあわせもつのが Cordelia である。彼女にとって, Lear を父として敬い王として崇め (“I love your majesty / According to my bond” (I. i. 92-93)), 人間としていたわることは (“Had you not been their father, these white flakes / Did challenge pity of them” (IV. vii. 30-31)) 同じことである。“A sense of extreme good in the commonest expression of a woman’s kindness” が表わされるといふ Barbara Everett の指摘は Cordelia の本質をよくとらえているように思われる。²⁰

「コーディーリアの輝くばかりのやさしさは、愛が高慢、怒り、憎悪にうち克って、それ自身の権利を回復するこの感動的な瞬間を照らし出すのである」とアンリ・フリュシェールが述べる²¹ Lear と Cordelia の再会の場面は Cordelia をまさに “Kind and dear Princess!” にする。

O my dear father! Restoration hang
Thy medicine on my lips, and let this kiss
Repair those violent harms that my two sisters
Have in thy reverence made!

....

Was this a face
To be oppos'd against the warring winds?
To stand against the deep dread-bolted thunder?
In the most terrible and nimble stroke
Of quick, cross lightning? to watch — poor *perdu*! —
With this thin helm? Mine enemy's dog,
Though he had bit me, should have stood that night
Against my fire. And wast thou fain, poor father,
To hovel thee with swine and rogues forlorn,
In short and musty straw! Alack, alack!

(IV. vii. 26-40)

Arthur Sewall も指摘しているように、Cordelia の愛情は病氣治癒のイメージで示され、父王は残酷な仕打ちを受けた人間と重ねられ一般化されている。“Nothing, my lord.” (I. i. 87) ときっぱりと断言した Cordelia のきびしく結ばれた唇は、ここで、苦しみを癒し理性を回復させるやさしき唇となる。親と子、王と臣、人間と人間の絆を認識し、その認識によって裏打ちされた責任と愛情を表すキスである。Gloucester の従者たちが示した哀憐の情が治癒のイメージで表現されることはすでに触れたが、Cordelia の涙は自然の治癒力、甦りのイメージで光る。

All bless'd secrets,
All you unpublish'd virtues of the earth,
Spring with my tears! be aidant and remediate
In the good man's distress! (IV. iv. 15-18)

王の受けた苦難を知らされるときの Cordelia もその父王を思うところは恵みの自然のイメージで表現されている。このイメージは荒れ狂う嵐とコントラストするものである。

.... You have seen

Sunshine and rain at once; her smile and tears

Were like, a better way; those happy smiles

That play'd on her ripe lip seem'd not to know

What guest were in her eyes; which parted thence,

As pearls from diamonds dropp'd.

(IV. iii. 18-23)

Cordelia の涙は真珠であり “holy water” (31) であり、その美しい眼はダイヤモンド, “heavenly eyes”(31) と描写される。このような Cordelia にキリスト, あるいはキリストの絶対的愛を見出す批評家がいても不思議ではない。²³ 彼女は “one daughter,/ Who redeems nature from the general curse/ which twain have brought her to.” (IV. vi. 206-208) ともいわれているのである。

Alfred Harbage は *Shakespeare and the Rival Tradition* において, “*King Lear* is but one of the plays in which a fissure within families, unkindness in blood kin, is equated with universal chaos.” と述べている。²⁴ 国家社会の縮図であり、最小単位である家庭において、血肉を分ち持つ最も身近な他者に対する kindness の欠如はすなわち冷酷残忍であり、世界の混沌と照応するものである。この肉親に対する冷酷な行為は生物学的弱肉強食の原理をもっとも露骨がつなまなましく実行に移したものといえよう。この根源的な人間関係を食物にする行為はあらゆる人間関係の崩壊、世界秩序の崩壊に通ずるものである。

人倫を “plague of custom” (I. ii. 3) と罵り、培われてきた国々の法を “curiosity of nations” (4) と否定して、我欲追及を信条とする、base nature の落し子である自然児 Edmund。彼は身体強健にして、頭脳明析、意思強固。不利な条件にうち克って適者生存の世の優等生たらんとする。彼は内心ほくそ

えむで語る。

...unnaturalness between the child and the parent; death, dearth,
dissolutions of ancient amities; divisions in state; menaces and
maledictions against King and nobles; needless diffidences,
banishment of friends, dissipation of cohorts, nuptial breaches,
and I know not what.

(underlines added, I. ii. 151-156)

しかし、「その他数知れず」はアイロニカルである。

King Lear の世界は、「賢い」人間が unkind になるとき、適者の条件を喪失する世界である。このことを Edmund は知らない。Lear の狂気に理性があるように(“Reason in madness” (IV. vi. 177)) Edmund の正気は狂気である。法を犯し^{のり}骨肉相食む乱倫を天は許さない。

If that the heavens do not their visible spirits
Send quickly down to tame these vilde offences,
It will come,
Humanity must perforce prey on itself,
Like monsters of the deep.

(IV. ii. 46-50)

Edmund の弱肉強食の合理主義は成功する如くであるが破綻し、運命の女神は Goneril や Regan に微笑むように見えるが、彼女たちはみずからの飽くなき打算主義、欲望によって見事に裏切られる。unkind な人びとは自滅する。

我欲の命ずるがままに行動する人間は生存に適せず、自壊するだけではない。*King Lear* にはもっと大きなパラドックスがある。

Lear や Gloucester の受苦は彼らみずからが招いたものには違いない。しかし、真實の判断に誤まり善なるものを追放するばかげた行為に乗じて、暴威をふるうのが悪の力である。「nature (世界・人間の情愛) に呪いをもたらした」(IV. vi. 207-208) のは二人の姉娘であり、この呪いの普遍性を強調するのが Edmund である。しかしながら、彼らの徹底した悪虐非道は、その犠牲となる Lear と Gloucester に覚醒再生をもたらす触媒として作用する。「苦難が善人²⁵たちには愛という奇蹟をもたらし人間性を高める」のである。*King Lear*

における一大パラドックスである。悪のもたらす苦しみは、王や老臣に潜在する観念的な kindness の情を甦らし活性化するのである。“Nothing almost sees miracles, / But misery” (II. ii. 165-166) である。悲劇のどん底に落ちたものに対して奇蹟が表われるのである。悪人たちは、窮極的にはみずからの行為で自己を破壊するだけでなく、いわば、老王を人間化することによって、形態化し空洞化した秩序に対して活性剤の役割を果たすことになるのである。この活性剤が、たとえ Lear のブリテン王国にとってもはや手遅れであるにせよ、王国の形而上学的基盤となる秩序の観念に包含される倫理を活性化する、といえるであろう。

4

今日では使い古された単純な語 kind(ness) に Shakespeare の巨大な悲劇 *King Lear* における一基本的主題を見出し、コメントを試みてみた。比較的新しい *King Lear* 評で、この作品を今日のわれわれにつきつけた感じを与えるのが Maynard Mack の *King Lear in Our Times* である。Mack は、*Lear* の世界を人間と人間が無限に織りなす絆の入り込んだもの “web of ties” としてとらえ、人間の存在そのものが他者との関係において提示されていることを見事に説いている。

In writing *King Lear*, Shakespeare's imagination appears to have been so fully oriented toward presenting human reality as a web of ties commutual that not only characterization and action, but language, theme, and even the very *mise en scène* are influenced.²⁶

人間として存在することは他者とかかわることであるが故に必然的に悲劇的である。実存は忍苦である。したがって、苦難を耐え忍ぶことが存在の条件となるが、忍耐は、また他者との関係と愛において、成長し成熟する能力と神秘的に結びつく。Mack がいうこの “Capacity to grow and ripen—in relation and in love”²⁷ を別のことばになおせば capacity to be kind になるであろう。地位や権力, “robes and furr'd gowns” (IV. vi. 167) の虚飾を放棄したあと、

人間を人間たらしめる資質であり、また、王の絶対的権力に意味を与える資質——それが kindness である。Lear がその両腕に抱かれて息をひきとる Cordelia の唇に感じたもの——それが kindness である。それは形而上学的愛の観念が形而下的に具体化され受肉され人間化された資質である。

註

1. William Shakespeare, *King Lear*, ed. Kenneth Muir (London: Methuen, 1971), I. i. 123-124. 以下 *King Lear* からの引用はすべてこの Arden 版により本文で示す。
2. John F. Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature: A Study of King Lear* (1948, rpt. London: Faber and Faber, 1965), p. 125.
3. Danby; Robert Bechtold Heilman, *This Great Stage: Image and Structure in King Lear* (1948, rpt. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1976); Arthur Sewall, *Character and Society in Shakespeare* (1951), pp. 108-121, rpt. in *Shakespeare: The Tragedies*, ed. Alfred Harbage (Englewood Cliffs. N. J.: Prentice-Hall, 1964); Paul Siegel, "Adversity and Miracle of Love in *King Lear*," *Shakespeare Quarterly*, 6 (1955); L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes* (1959), rpt. *Some Shakespearean Themes and An Approach to Hamlet* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1960); Sears Jayne, "Charity in *King Lear*," *Shakespeare Quarterly*, 15 (1964); ピーター・ミルワード, 安西徹雄監修『「リア王」における「自然」』(東京: 荒竹出版, 1976); Terence Hawkes, "Love in *King Lear*," (1959), rpt. in *Shakespeare: King Lear*, ed. Frank Kermode (London: Macmillan, 1975) は "love" という語の古い意味についての言語学的覚書。
4. *The Tempest*, ed. Frank Kermode (London: Methuen, 1963), V. i. 21-24.
5. G. K. Hunter, "Introduction," *King Lear* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1974), p. 33.
6. C. S. Lewis, *Studies in Words*, 2nd ed. (1967, rpt. Cambridge: Cambridge U. P., 1975), pp. 26-33; *OED*, "kind".
7. Walter Clyde Curry, *Shakespeare's Philosophical Patterns* (Baton

- Rouge: Louisiana U. P., 1937) p. 22.
8. A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (1904, rpt. New York: Meridian Books, 1957), p. 230.
 9. loc. cit.
 10. 注3の多くの critics 以外にも, Harley Granville-Barker は, よく知られているように, Lear は舞台芸術としては成功していないとする Bradley に対する反論においてであるが, 貧者への祈りを, "the turning point... of the play's main theme" と述べている。 *Prefaces to Shakespeare; 2 King Lear, Antony and Cleopatra* (1930, rpt. London: Batsford, 1974), p. 20.
 11. Hardin Craig, *The Enchanted Glass* (1935, rpt. Oxford: Basil Blackwell, 1966); Theodore Spencer, *Shakespeare and the Nature of Man* (1942, 2nd ed, rpt. New York: Macmillan, 1966); E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (1943, rpt. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1963).
 12. Bradley, pp. 210-211; Spencer, pp. 136-142; Heilman, pp. 32 ff. 等。
 13. Kenneth Muir, "Madness in *King Lear*," *Shakespeare Survey*, 13 (1960), 32-33.
 14. Enid Welsford, *The Fool: His Social and Literary History* (1935, rpt. London: Faber and Faber, 1968), p. 258; Harry Levin, *Shakespeare and the Revolution of the Times* (New York: Oxford U. P.), p. 182; Maynard Mack, *King Lear in Our Times* (1965, rpt. Berkeley and Los Angeles: University of California P., 1972), p. 109.
 15. Bradley, pp. 211-212.
 16. Wolfgang Clemen, *Shakespeare's Dramatic Art* (London: Methuen, 1972), p. 180.
 17. Knights, p. 101.
 18. Welford, p. 267.
 19. Bradley, p. 245.
 20. Barbara Everett, "The New *King Lear*," (1960) in ed. Kermode, p. 201.
 21. アンリ・フリュシエール『シェイクスピア: エリザベス朝の劇作家』(1948), 笹山隆訳 (東京: 研究社, 1969), p. 359.

22. Sewell, p. 144.
23. Siegel, p. 335; George Ian Duthie, "Introduction," *King Lear*, eds. John Dover Wilson and George Ian Duthie (1960, rpt. Cambridge: Cambridge U. P., 1975), p. xx; 笹山隆「リア王」, 『シェイクスピア・ハンドブック』小津次郎編 (東京: 南雲堂, 1969), p. 414.
24. Alfred Harbage, *Shakespeare and the Rival Traditions* (1952, rpt. Bloomington and London: Indiana U. P., 1970), p. 255.
25. Siegel, p. 326.
26. Mack, p. 100.
27. *ibid.*, p. 112.

Summary

"Kindness" in *King Lear*

Seiki Kinjo

"Kind" seems to function as a key word in *King Lear* and the concept embodied in it to be no less crucial than the ideas of "nature," "bond," and "charity," which have undergone much critical elaboration. Surprisingly enough, however, "kind" has as yet not received the critical attention it deserves.

In *King Lear* "kindness" is manifested in actual human relationships. Semantically and conceptually it is related with "nature," for "kindness" is a quality that is thought to be "natural" to a human being; indeed, its presence identifies a person as one of human kind, as distinct from the wild beasts. In other words, it distinguishes good characters from bad. Cordelia's "kindness" is associated with the healing power of nature. Ultimately, the world of *King Lear* dictates that to be human is to be kind. Therefore "kindness" reflects and corresponds with benevolent nature, that is with the ordered universe as metaphysically conceived.

The purgatorial sufferings of Lear and Gloucester, inflicted on them by their unnatural offsprings, prove to be purgative. Through them they learn "kindness." Their fall is more than compensated when they learn to feel "fellow feeling," first toward those who are suffering in their close propinquity, then expanded into a concern for the poor and deprived, who are, however, seen only in the mind's eye. Ironically in *King Lear*, following Edmund's credo of the survival of the fittest, the unnatural monsters prove they are not fit to survive in the *Lear* world precisely because they lack "kindness." Evil destroys itself. But the consummate irony is that the "unkind" characters unwittingly help to redeem their victims, revitalizing the order of existence with an affirmation in ethical and conceptual terms, if not in political-social terms.